

今日の段落は、最後の晩餐の席における主イエスの説教の締めくくりである。

25節。「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。」

「たとえ」と訳されている言葉は(παροιμία、パロイミア)は、ヨハネ福音書に4回(この25節で2回、29節、もう一回は10:6)とⅡペトロ2:22(「ことわざ」と訳され千ている言葉)しか使われていない。ヨハネ福音書の10章6節などによると、「たとえ」で語られた言葉は、聞いた者が何のことか分からない、つまり、主イエスがこれまで語って来た言葉(10章1節以下の「羊の門」とか「羊飼い」のたとえなど)がどういう意味であるか弟子たちにとっても分からなかった。それが分かるようになるのは、主イエスの十字架と復活、昇天、聖霊降臨後になる。「もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る」とは、このような出来事を経ての時である。具体的には聖霊降臨。「聖霊=助け主御自身が教え、すべての真理に導くことになるからである。」(NTD)

26節。「その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。」

「その日」とは、「聖霊におけるイエスの再来の日を指す」(NTD)。聖霊降臨後、キリスト者たちは、「わたしの名」すなわち主イエスに名によって父なる神に祈るようになった(15:16参照)。聖霊が与えられてからキリスト者が主イエスの名によって父なる神に祈る祈りはすべて聞かれるようになった。いちいち主イエスに告げ、それを受け主イエスが祈る者の代わりとなって父なる神に願うという手順は必要無くなったのである(参照。ローマ8:34、ヘブライ7:25、ヨハネー2:1)

27節。「父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである。」

26節のような祈りが可能になる根拠は、父なる神が独り子イエスを愛しておられる愛で、弟子たち(キリスト者たち)を愛しておられるからです。父なる神と独り子イエスとの深い愛の交わりが、主イエスが「神のもとから出て来たことを信じる」者にも等しく与えられる。それ故、主イエスの名によって直接父なる神に祈ることができるようになったのである。主イエスの名によってではあるが、父なる神に直接祈ることができることは、父なる神の主イエスに愛と同じ愛が弟子たちに注がれていることの証拠でもある。主イエスが「神のものから出て来たことを信じる」者は、父と子の深い愛の交わりが与えられるのである。

28節。「わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」

「28 節は、神に遣わされた者イエスにおいて現れた神の愛の内容を、一つの教義の様式にまとめて繰り返す。これはまさしく、ヨハネ的キリスト論の典型的定式である。——イエスは父の所から出て（＝先在）、この世に来（＝受肉）、またこの世を去って（＝十字架死と復活）、父の所に帰る（＝イエスの最終的な栄化）」（NTD）

29—30 節. 「弟子たちは言った。『今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。あなたが何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。』」

弟子たちの信仰告白の言葉。この告白は、最後の晩餐の席で語ったようになっているが、そうではなく、聖霊降臨後の弟子たちの告白、もっと言えば、この福音書を書いた1世紀末のヨハネ教会のキリスト者たちの信仰告白である。「今、分かりました」とは、永遠の「今」ということにもなる。イエスが神様の許から来た救い主であることが分かる「今」、そのことを信じる「今」である。

「あなたが何でもご存じで」と弟子たちは告白するが、「全知全能というのは古代の考えによれば、神のしるしである。とするとこの30 節は、20 章28 節の『わたしの主よ、わたしの神よ』というトマスの告白を、ある意味では先取りしていることになる。」（NTD）

31—32 節. 「イエスはお答えになった。『今ようやく、信じるようになったのか。だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。』」

「別れに臨んだイエスが十一弟子に答える最後の答えである。イエスの答えは弟子たちの信仰を根本から疑問視するものではないが、それでもやはり彼らの信仰にはこういった反問を受けざるを得ないものがあるのである。弟子たちの離散の時はこれから来るだけでなく、もう来ているのである。」（NTD）

「『しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ』は、神に見捨てられた叫びを記した共観福音書の十字架刑記事に対する修正かと思われる。天の父はその子を苦難の最後の時においてもひとりにしなかった、とヨハネははっきり言うのである。」（NTD）

33 節. 「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

最後の説教のまとめ。「弟子たちは、たとえイエスを見捨てても、はやりイエスにあって平安を持っている。この慰め深い保証によって、この世とすべての時代における信仰の状況が略述されていることは明らかである。この世にあって信仰は常に圧迫されているであろう。『しかし』——と別れに臨んだ使者イエスは弟子たちに呼びかける——『安心しなさい。わたしがこの世に勝っているのだ』。イエスの受難も、屈辱的な十字架の死も、それは同時に勝利であり凱旋である。その時イエスはずいぶん父の所に帰って、天にある栄光を受けることになるのだからである。」（NTD）復活の主イエスによる平和（20:19, 21）